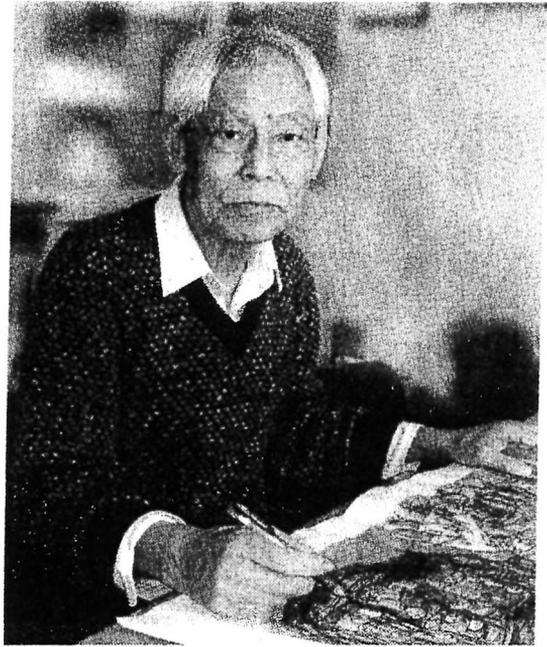


米軍の空襲の惨状を絵で
伝え続ける



こじま
小島 義一さん

「泣きながら描いています」。十三歳、工業学校一年生のときに体験した米軍空襲。今の子どもたちにも見てほしいと、水彩の抑えた筆致で描いています。

終戦の年の五月二十四日。東京の荏原（えばら）区（現・品川区）西中延（にしなかのぶ）でした。束のように落ちてくる焼夷（しょうい）弾。火の海の中を祖母、父、四歳の弟

と逃げ惑いました。

母親と小さな子の真っ黒な死体を、鉄板に乗せて運ぶのも見ました。「逃げ回っていたときの真っ青な顔、逃げ切れなくて、じりじり焼かれた苦しさが脳裏に浮かんできました」

絵を学んだ青年時代。その後、独立プロなどの映画の普及に携わりました。長年、空襲の悲惨さを伝えななくてはと、思い続けてきま

「平和のための戦争展・小平」実行
委員。東京都小平市在住。72歳

した。でも、描けませんでした。「焼死体を描くということは、容易なことではありません」

その気持ちを吹っ切ったのは二〇〇〇年。森首相の「銃後の守りを」発言などきな臭い動きでした。「戦争の怖さを知ってもらいたい」。同年七月の「平和のための戦争展・小平」に出展したのが最初です。

これまでに七十枚を描き、「今こそ使ってほしい」と三つの平和団体に寄贈しました。「二心の区切りとして、百枚は描こうと思っています」

妹は学童疎開の体験者です。江戸東京博物館で三月八日から十三日まで開かれる「第六回語り継ぐ学童疎開展」に、請われて、絵二十八枚を出展。疎開した先の空襲で命を奪われた子どもの姿も描いています。